

荒川の大洪水（昭和30年代～平成）

～カスリーン台風以降の洪水～

昭和33年の狩野川台風では戸田市の約7割が浸水しました。他にも昭和49年、昭和57年、平成11年など各地でたびたび洪水に見舞われています。



御成橋付近（平常時）



平成11年8月の洪水の様子（さいたま市）

カスリーン台風以降の洪水

1947（昭和22）年のカスリーン台風以降も荒川流域を洪水が襲います。1958（昭和33）年の狩野川台風では戸田市の約7割が浸水する被害になり、荒川の水利に機動隊や自衛隊も出動する事態となりました。

1974（昭和49）年の洪水では、荒川上流事務所管内の護岸や堤防法面の破損など、40か所が被災。1982（昭和57）年、1999（平成11）年、2007（平成19）年と、洪水にたびたび見舞われています。

▶ 1958（昭和33）年の洪水

1958（昭和33）年9月洪水は、狩野川台風によるものであり、累加雨量は、秩父観測所、名栗観測所で300mm以上を記録しました。この洪水により、死者・行方不明者42人、床下浸水370,385戸、床上浸水135,189戸、全半壊・流失969戸の被害が発生しました。

戸田町（現・戸田市）では約7割が浸水し、床上600戸、床下1,200戸の浸水被害により、災害救助法が適用され自衛隊が出動しました。

▶ 1974（昭和49）年の洪水

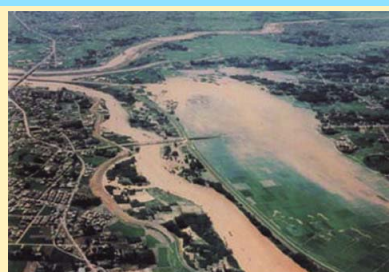
台風16号の雨は8月31日から降り始め、山沿いに記録的な豪雨をもたらしました。飯能市の刈場坂峠で総雨量495mmとなり、入間川合流後の荒川・治水橋地点では、翌1日早朝から水位が上昇し、2日午後4時には警戒水位を2.61m上回る最高水位を記録しました。降り始めから翌9月1日の降り終わりまでの総雨量は、荒川上流部380mm、入間川流域220～320mmに達しました。この洪水により、行方不明者1人、床下浸水3,162戸、床上浸水168戸の被害が発生しました。

当事務所管内では護岸や堤防法面の破損など、40ヶ所が被災しました。

▶ 1982（昭和57）年の洪水

本州を縦断した台風18号の総雨量は、9月10日の降り始めから12日の降り終わりまで、三峰336mm、名栗348mm、川越338mmで、荒川上流域にほぼ平均して降りました。これにより、死者・行方不明者4人、床下浸水20戸の被害が発生しました。この雨で人口増加の著しい、入間川、新河岸川は大きな被害を受け、特に新河岸川では被害総額211億円にも及ぶ甚大な被害となりました。

この災害で新河岸川は、国の激甚災害対策特別緊急事業の指定を受け、集中的な河川改修工事が実施されました。



写真手前から越辺川、小畔川、入間川

▶ 1999（平成11）年の洪水

弱い熱帯低気圧、という言葉のイメージから誰もが安心していた8月のお盆の最中の大雨でした。動きの遅い雨雲が関東地方を覆い、荒川流域では13日夜から14日夜にかけて断続的な豪雨に見舞われました。三峰観測所では総雨量497mmを記録し、熊谷水位観測所、治水橋水位観測所では観測開始以来、過去最高となる水位を観測しました。この洪水により、床下浸水1,741戸、床上浸水622戸、全半壊・流失2戸の被害が発生しました。

この洪水ではこれまでの治水施設の効果をみる一方、堤防未整備地区で浸水被害が発生しています。



京成押上線橋梁に迫る洪水

▶ 2007（平成19）年の洪水

台風9号により、荒川流域では2007（平成19）年9月5日から7日にかけて大雨となり、5日の降り始めからの雨量は、三峰雨量観測所にて総雨量573mmを記録しました。また、荒川の熊谷水位観測所では、はん濫危険水位（危険水位）を越え観測開始以来の最高水位を記録したほか、都幾川の野本水位観測所、高麗川の坂戸水位観測所でも、はん濫危険水位（危険水位）を越えました。この洪水により、床下浸水1,741戸、床上浸水622戸、全半壊・流失2戸の被害が発生しました。

コ ラ ム 荒川第一調節池による洪水調節

1999（平成11）年荒川第一調節池（当時建設中、貯水池の「彩湖」は1997（平成9）年完成）は、貯水池完成後初めて洪水が流入し、最大時で毎秒690立方メートルの洪水調節効果を発揮しました。



流入堤からの流入状況



荒川第一調節池による洪水調節